

高齢者ケア施設の管理職の日米比較研究

——2つの模範的施設の事例分析——

鹿児島大学

片桐資津子

1 目的と方法

この報告の目的は「ケアの質的向上」や「ケア文化の変革」をめざしている模範的な高齢者ケア施設を取り上げ、その経営管理職が、施設外と施設内において、どのような機能を果たしているのか、日本と米国の施設を比較する方法により、その共通点と相違点を明らかにすることである。

2 調査方法

日本と米国それぞれの管理職とケア職に対して、2013年以降、断続的なかたちで、半構造化されたインタビュー調査を実施してきた。対象は、日本国内の地方部K町に立地する特養ホームSと米国オレゴン州の地方部M町に立地するナーシングセンターBを選定した。

日本国内のK町は人口が5000人程度の自治体で、少子高齢化が進む典型的な地域社会である。他方、米国オレゴン州のM町は人口が3000人程度の町で、歴史的にみてカトリック文化が根づく地域社会である。前者の高齢者ケア施設は日本で一般的にみられる社会福祉法人による経営であり、後者は非営利組織による経営となっている。両者とも、よいケアを提供する施設として地域住民やケア専門家からの評判が高いため、本研究対象として選定した。

3 結果

分析の結果、つぎのような共通点と相違点が示された。まず日米の共通点については、第1に、管理職はセクショナリズムの壁を越えるための工夫、すなわちチームアプローチを実践するよう促していた。第2に、管理職は職員研修を充実させていた。

つぎに相違点については、日本国内のK町に立地するS施設の場合、トップマネージャーである管理職は、ケア現場におけるミドルマネージャーとの連携に力を入れていた。これに対して、米国M町のB施設の場合、よいケアが提供できている理由を探索したところ、寄付活動の仕方と職員研修のあり方にトップマネジメントを機能させていることがわかった。さらに米国M町に立地するB施設のケア現場では、母語の異なる白人とラティノーの職員間の情報共有に力点を置くための試行錯誤も明らかになった。

4 結論

日本における社会福祉法人による施設管理職の場合、介護報酬という最小限のリソースの範囲内で、ケア現場の最大限の努力により、よいケアを提供していた。他方、米国における非営利組織による施設管理職の場合は、よいケアを提供するために必要なリソースをはじきだしたうえで、不足するリソースについては寄付金や保険料をより多く獲得するという経営努力をおこなっていた。

文献

池崎澄江, 2012, 「アメリカのナーシングホームにおけるケアの質の管理」『季刊社会保障研究』48(2): 165-174.

片桐資津子, 2014, 「特養経営モデル再考——地方部に立地する2つの従来型特養の事例研究」『ソシオロギス』38: 18-44.